

没後10年

小倉遊亀展

Ogura Yuki Retrospective
とうとう絵かきになってしまった

当館では2010(平成22)年2月18日(木)から4月4日(日)まで「没後10年 小倉遊亀展」を開催いたします。

本展覧会は、明治28(1895)年に滋賀県に生まれ、20代半ばで絵の道に入って以来その後およそ80年の長きにわたり、日本画界の第一線で活躍した画家、小倉遊亀の画業を紹介するものです。100歳にして絵筆を握り、105歳の長寿を全うした日本画家・小倉遊亀の没後10年(享年105、2000=平成12年没)にあたる回顧展でもあります。

その作品は日本画の伝統を引き継ぎながらも、日常の感覚に支えられた近代的な表現で親しみやすいものである一方で、同時代の日本画表現の枠を超えた斬新で大胆な表現は、新鮮な感覚と独創性に満ちています。本展は、終生意欲的な創作を続けた画家の創造の軌跡をたどるとともに、画家自身の溢れる人間的魅力にも迫ろうとするものです。

出展作品は身近な人々を慈しみ深く描いた人物画と、従来の日本画における花鳥表現の枠を超え、極めてモダンな感覚にもとづく静物画の代表作を中心に約100点で構成します。

さまざまな美術表現が溢れ、絵画そのもののあり方が問われている現在、観る者に安らぎと活力を与え、いまま輝きを失わない小倉遊亀の作品とその生涯をふり返ります。

【開催趣旨】

1895(明治28)年に滋賀県に生まれ、2000(平成12)年に105歳で世を去った画家、小倉遊亀の画業を紹介する展覧会です。小倉遊亀は奈良女子高等師範学校(現在の奈良女子大学)を総代で卒業し、しばらく教師の職にありましたが、絵への情熱を捨てきれず、25歳の時、安田靉彦に入門し日本画家への道を歩みはじめました。27歳で日本美術院試作展覧会に初入選、31歳で院展に初入選後は毎年入選を重ね、日本画家として着実に地歩を固めてゆきました。同時代の女性風俗、静物などを得意とし、女性ならではの細やかな観察眼と感性でとらえられたその世界は今なおみずみずしい輝きを放っています。遊亀の作品はまた、簡潔で力強い造形、大胆にデフォルメされた形態による構成を特色とし、それにより対象の生命感、実在感が強く表現されています。

本展覧会は、画家の没後10年にあたり、代表作を含め初期から最晩年までの作品約100点でその画業を回顧するものです。20世紀の激動の時代を生き、明治から平成までおよそ80年にわたる創作活動の中で時代の諸相を生き生きと描き出した画家、小倉遊亀の世界を紹介します。

- 【会 期】 2010（平成22）年 2月18日（木）～4月4日（日） 40日間
会期中展示替えあり・前期*2月18日～3月14日 後期*3月16日～4月4日
- 【開館時間】 午前10時～午後6時（金・土曜日は午後8時まで、入場は閉館30分前まで）
- 【休館日】 毎週月曜 ただし、3月22日（月・祝）は開館、翌23日（火）は休館
- 【会 場】 兵庫県立美術館 企画展示室
- 【主 催】 兵庫県立美術館 朝日新聞社
- 【後 援】 兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会
- 【特別協力】 滋賀県立近代美術館
- 【協 力】 ホテルオークラ神戸
- 【協 賛】 野崎印刷紙業株式会社
- 【入場料】 一 般 1,200（1,000）円
大・高生 900（700）円
中・小生 500（300）円
（ ）内は前売りおよび20名以上の団体割引料金
兵庫県内に在住・在学の中・小生はココロンカードの提示により無料
障害のある方（介護の方1名も）、および兵庫県内に住む65歳以上の方は当日料金の半額
コレクション展の観覧には別途観覧料が必要（本展とあわせて観覧される場合は割引あり）

【展覧会の見どころ】

1．小倉遊亀の初期から晩年までの代表作約 100 点を総合的に展観

1926（昭和元）年、第13回院展に《胡瓜》が初入選して以降、105歳で逝去した2000（平成12）年の第83回院展に絶筆《盛花》が出品されるまで連続して院展に出品し、日本美術院を活動の場として創作を行った小倉遊亀。その80余年にわたる創作活動を大正時代から平成に至るまでの代表作約100点でたどります。なお本展は優れた小倉遊亀コレクションで知られる滋賀県立近代美術館の全面的な協力を得て開催するものです。

2．清新な感覚にあふれる小倉遊亀の創作の軌跡をたどる

小倉遊亀の作品の魅力は、何と云っても描かれたものが皆すべて生き生きと輝き、生命感に溢れていることにあるでしょう。身のまわりにある対象を描きながらも平凡な描写におわることなく、対象が力強い存在感を放って観る者に迫ってきます。その魅力はどこからくるのでしょうか。展覧会では人物画約40点、静物画約40点を展示し、小倉遊亀の創作の軌跡をたどり、画家の言葉なども紹介しながら作品の魅力に迫ります。

3．下図や挿絵、緞帳の下絵など多彩な活動を併せて紹介

小倉遊亀は本制作のほかに雑誌の表紙絵や小説の挿絵、緞帳の下絵、また薬師寺修二会で配られる散華の下絵、晩年には書や陶器の絵付けなど様々な仕事にとりくみました。これらの作品では、即興的で軽妙洒脱な表現がみられ、本業の絵画制作とはまた異なった画家の一面をうかがうことができます。本展では、あ

まり展示される機会のないこれらの原画約 40 点をまとめてご紹介します。

【展覧会構成】

第1章 日本画家としての出発 戦前期の作品を中心に

小倉遊亀が本格的に活動を始めた大正末から戦争中にかけての代表作約 20 点を展示します。25 歳の時安田靉彦を訪ねた遊亀は、靉彦の助言のもと心あらたに制作の道を歩みはじめました。この時期、身近な人物や静物、風景を題材とした作品が描かれており、その端正な筆致からは絵に対する遊亀のひたむきな姿勢をうかがうことができます。《浴女その一》(1938 年)は水で屈曲する女性の身体やタイルの線の造形的な面白さに着目して描かれた作品で、清潔感にあふれた清々しい表現は当時も話題となりました。



《首夏》 1928年
滋賀県立近代美術館蔵



《晴日》 1937年



《浴女その一》 1938年
東京国立近代美術館蔵
(展示期間：2/18-3/17)

第2章 新しい日本画を求めて 人物編～遊亀をめぐる人々

あらゆる価値観が見直された戦後、日本画の世界にも大きな変化が訪れました。大胆なデフォルメと形態の単純化をとおして、近代絵画としての日本画を遊亀は意識的に追求していくこととなります。《娘》(1951 年)はその象徴ともいえる作品で、くつろいで籐椅子に腰掛ける伸びやかな娘の姿が画面一杯に力強く描かれています。この時代、優れた女性画家に贈られる第 4 回上村松園賞を受賞した、《O 夫人坐像》(1953 年)名女優越路吹雪をモデルに描いた《越ちゃんの休日》(1960 年)、生けるものすべてに通い合う愛と生きる喜びを感じあう健やかな気持ちに満ちた世界をイメージして描いた《径こみち》(1966)など、多くの人物画の名作が生まれました。また遊亀独自の解釈と表現による菩薩像も多く描かれています。第 2 章では、仏画も含め、人物を描いた作品約 30 点を展示します。



《娘》 1951年
滋賀県立近代美術館蔵



《O 夫人坐像》 1953年
東京国立近代美術館蔵
(展示期間：2/9-4/4)



《コーちゃんの休日》 1960年
東京都現代美術館蔵



《径》 1966年

東京藝術大学大学美術館蔵

(展示期間：2/18-3/7)



《舞妓》1969年

京都国立近代美術館蔵

コラム 画の苗床 - 遊亀と日本美術院

小倉遊亀は、1926(昭和元)年に院展に初入選して以後、2000(平成12)年に絶筆が出品されるまで院展に出品しつづけた。遊亀が日本美術院を活動の場を選び、1924(大正9)年に弟子入りを志願して安田靫彦のもとに向かうきっかけをつくったのは、奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)時代に出会った二人の教師であった。図画の教授、横山常五郎と歴史学の教授、水木要太郎である。見学実習で訪れた法隆寺の金堂壁画を前に「この線をひける人は、今は安田靫彦しかいない」と話す横山の言葉によって安田靫彦という名を知り、安田靫彦とも旧知の間柄であった水木による奈良の古社寺を訪ね歩く実地講義によって、古美術への関心を深めたのであった。

遊亀は美術院について次のような言葉を遺している。「思いかえせば、美術院は私の温床であった。私はここで培われ、ここで発芽した。そしてここで苦しみ育って一本の樹にして頂いた。」「全体を通じて革新的であり、「何か」を持っているのは院展の作家であることがはっきりする。(略)その「何か」は観る者につきぬ余韻を残す。」靫彦だけでなく、同じく美術院の作家であった速水御舟や小林古径に対しても遊亀は大きな共感を寄せている。小倉遊亀はこれらの作家の作品の中に、革新性、人の深さや魅力を感じるのだと言っている。遊亀の作品の根底を流れるあたたかさ、奔放ともいえる自由さ、伸びやかさは、日本美術院の作家への共感と敬意から生じたものでもあるのだろう。(兵庫県立美術館学芸員・飯尾由貴子)

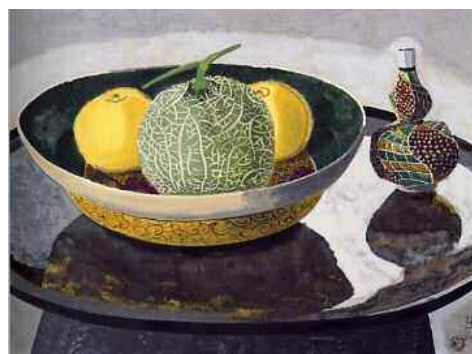
第3章 いのちを見つめて 静物編～遊亀が愛したものたち

小倉遊亀は人物画だけでなく静物画の名作も多く描いています。教師としての仕事、病気がちの母の世話そして絵画制作と、多忙な生活を送らざるをえなかった遊亀にとって、静物画は身近な題材で自分の世界を表現できる領域でした。第3章でご紹介する静物画には、野菜や果物、梅や椿などが、遊亀の好んだ器と組み合わせられて生き生きと描かれています。大胆ともいえる簡潔な構図と瑞々しい色彩によるこれらの静物画は人物画と並ぶ重要なジャンルであり、そこには対象を温かく見つめる画家のまなざしが感じられます。



《葡萄》 1959年

滋賀県立近代美術館蔵



《明果》 1965年



《椿花》1969年

高島屋史料館蔵

コラム わが心を信ず - 遊亀と仏画

1941(昭和16)年、小倉遊亀は第28回院展に《観世音菩薩》という作品を出品した。院展同人となり10年、年齢も四十代の半ばをむかえ、押しも押されもせぬ中堅画家として世に出ているはずの作家は、夫・小倉鉄樹から思いもかけぬ一言を聞く。「お前さんにはまだあと十年観音様は描けないな」。臨濟宗の禅僧であり、師とも仰いだ夫にそう言はれ、「形だけの観音様をきばって描いて」といたと遊亀は深く反省した。もともと小倉遊亀の作品は、生き生きとした人物の活写と大胆な構図にその真価があったはずだが、1935(昭和10)年頃から徐々に院展の画風を意識しすぎて、かえって表現にある停滞をもたらしたのかもしれない。

それから10年、戦後の新しい時代の到来にあわせるかのように、遊亀はみごとに新境地を開いて見せた。モダンと形容され、フォービズム等の洋画との対比によって語られる作品を次々に発表した。しかし、遊亀はそれらの作品を自分の「信心」の表現だと語っている。「信心」とは形式的な信仰心ではなく、「わが心を信ず」ということであった。対象の姿をしっかりと感じ取る心。そのために、常に怠りなく心をぴんと張っておくこと。それは師・安田靉彦から授かった教えであった。その教えを、遊亀はたゆまず実践した。1968(昭和43)年、27年ぶりに遊亀は仏画《観自在》を描いたが、それは夫が生きていれば十分に納得させるものだった。しかし、遊亀の仏画は多くはない、むしろ舞妓を描いても野菜を描いても、それは遊亀にとっての仏となった。(宇都宮美術館学芸員・濱崎礼二)

本展は宇都宮美術館へ巡回します。会期：4月18日～5月30日

第4章 多彩な活動

第4章では、遊亀が行った多彩な活動をご紹介します。谷崎潤一郎の小説『少将滋幹の母』の挿絵(1949-1950年)、『細雪』の単行本のための挿絵(1970年)、『婦人之友』の表紙絵(1952年)など本制作以外にさまざまな制作活動を行っています。また1984年に制作した、母校奈良女子大学講堂の緞帳の原画、奈良・薬師寺の修二会で撒かれる散華の原画も描いています。これらの作品では、本制作にはない即興的で軽快な表現がみられます。本展ではこれらの挿絵原画などを展示し、小倉遊亀の多彩な活動を紹介します。



《細雪》挿絵より1970年頃
滋賀県立近代美術館蔵



《少将滋幹の母 口絵》1949-50年
滋賀県立近代美術館蔵

(参考) この展覧会は、平成20年12月5日に兵庫県立美術館と滋賀県立近代美術館との間で締結された「相互協力に関する基本協定」の成果として、滋賀県立近代美術館の全面的協力のもと、同館の持つ小倉遊亀の優れたコレクションと、研究成果の蓄積を生かして兵庫県立美術館で開催されるものです。



「爛漫」(緞帳原画) 1984年 奈良女子大学蔵

小倉遊亀略年譜

- 1895 (明治28) 年 3月1日、滋賀県大津市に生まれる。
- 1913 (大正2) 年 18歳 奈良女子高等師範学校 (現・奈良女子大学) 国語漢文科に入学する。
- 1917 (大正6) 年 22歳 奈良女子高等師範学校を総代で卒業。京都の第三高等小学校教諭となる。
- 1919 (大正8) 年 24歳 高等小学校教諭を退職、名古屋市の椋山高等女学校 (現・椋山女学園) 教諭となる。
- 1920 (大正9) 年 25歳 椋山高等女学校を退職、横浜の捜真女学校の講師となる。
大磯に安田靫彦を訪問し、指導を受けることとなる。
- 1926 (昭和元) 年 31歳 第13回院展に《胡瓜》が初入選、以後連続して院展に出品する。
- 1928 (昭和3) 年 33歳 日本美術院院友に推挙される。
- 1932 (昭和7) 年 37歳 女性として初めて日本美術院同人に推挙される。
- 1935 (昭和10) 年 40歳 熱海長畑山の修養道場、報恩会主宰の小林法運のもとに通い始める。
- 1936 (昭和11) 年 41歳 捜真女学校を退職。
山岡鉄舟門下の禅徒、小倉鉄樹を訪ね、以後その教えを受ける。
- 1938 (昭和13) 年 43歳 小倉鉄樹と結婚。
- 1944 (昭和19) 年 49歳 小倉鉄樹逝去。
- 1949 (昭和24) 年 54歳 母朝枝逝去。郷里大津より西川典春を養子に迎える。
- 1954 (昭和29) 年 59歳 《O夫人坐像》(1953年作) 及び、その他の業績に対して第4回上村松園賞が授与される。
- 1955 (昭和30) 年 60歳 《裸婦》(1954年作・焼失) に対し、昭和29年度芸能選奨美術部門文部大臣賞が授与される。
- 1957 (昭和32) 年 62歳 《小女》(1956年作) に対し、第8回毎日美術賞が授与される。
- 1958 (昭和33) 年 63歳 日本美術院の評議員となる。
- 1962 (昭和37) 年 67歳 《母子》(1961年) に対し、日本芸術院賞が授与される。
- 1973 (昭和48) 年 78歳 勲三等に叙され瑞宝章を授与される。
- 1976 (昭和51) 年 81歳 日本芸術院会員に任命される。女性としては上村松園に次ぎ二人目。
- 1978 (昭和53) 年 83歳 日本美術院理事に就任。
師、安田靫彦逝去。
文化功労者として顕彰される。
- 1980 (昭和55) 年 85歳 文化勲章を受章する。
- 1981 (昭和56) 年 86歳 日本美術院専務理事となる。大津市名誉市民となる。
- 1990 (平成2) 年 95歳 日本美術院理事長に就任。
- 1996 (平成8) 年 101歳 日本美術院理事長を退き、名誉理事長となる。
- 1998 (平成10) 年 104歳 母校の奈良女子大学より、同学第一号の名誉博士の称号を授与される。
- 2000 (平成12) 年 105歳 7月23日、急性呼吸不全のため逝去。
9月、第85回院展に絶筆《盛花》が出品される。

【記念講演会】

「小倉遊亀 その人と作品」 講師：高梨純次氏（滋賀県立近代美術館学芸課長）
3月7日（日） 14:00～15:30 当館ミュージアムホール（観覧券の半券提示により聴講無料）

【記念朗読会】

谷崎潤一郎《少将滋幹の母》～小倉遊亀の挿絵とともに味わう谷崎の世界～
解説：篠原嘉彦氏（谷崎記念館事務局長） 朗読：朗読グループRST
3月21日（日）14:00～15:30 当館ミュージアムホール（観覧券の半券提示により聴講無料）

【学芸員による解説会】

2月27日（土） 3月6日（土） 3月20日（土） 4月3日（土） 16:00～16:45
当館レクチャールーム（聴講無料）

【ミュージアム・ボランティアによる解説会】

当館ミュージアム・ボランティアが展示の見どころをご案内します。
会期中の毎週日曜日 11:00～11:15 当館レクチャールーム（聴講無料）

【こどものイベント】

「日本画を描こう！」
2月27日（土）13:30より約2時間、28日（日）10:30より約2時間
申し込み制・お問い合わせ：078-262-0908(こどものイベント係まで)

【問い合わせ先】 兵庫県立美術館
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

展覧会の内容に関すること 企画担当学芸員 飯尾由貴子
TEL 078-262-0909（直通）/ FAX 078-262-0913

情報提供・広報に関すること 営業・広報グループ
TEL 078-262-0901（代）/ 078-262-0905（直）/ FAX 078-262-0903
ホームページ <http://www.artm.pref.hyogo.jp>